

# 蚊柱

高橋玄洋

放送日 昭和37年9月2日  
番組名 グランド劇場  
(東京・大阪ガス)  
制作 NETテレビ  
演出 奈良井仁一  
音楽 渡辺 宙明

## 登場人物

田辺大三 尾上松緑  
高垣久美 岩崎加根子  
葬儀屋 青山 柳谷 寛  
その妻 かね 牧 よし子  
神 父 中村 栄二  
患者の夫 前島 直木みつ男  
医師 岩崎 林 孝一  
仏の姉 加藤土代子  
隣の男 田中 敏夫  
村の青年 新宮寺 寛  
少女 今村 享子  
その他――村人達

## 1 田辺診療所の縁先

真夏の午後の太陽がギラギラと照りつけている。

医師の田辺大三が縁先に無聊をかこっている。およそ医師らしい面影はない。看護婦の高垣久美が大三のシャツ等を干しに出て来る。

大三 (うちわを投げ出して、のびをして) おい、今晚はナンだ。

久美 (知らぬ顔でツンとして) (る)

大三 何んだ晚めしは？

久美、鶏を追う。(干からびた鶏の声)

大三 (又、うちわを拾って、やけにバタバタさせ) まあいい、わしの云いたいののは、ビフテキのこう厚い奴をがっぷり食いたいということだ。乾物ひものばっかし食つとると、人間カサついていかん。

久美 私のカサついてるのは生れつきです。

大三 そうかい、わしは又キリスト様に吸いとられたのかと思った。しかし、それ以上カサついて、背中にウロコが生はえても困るだろう。

久美 今晚は秋刀魚です。(と、云い捨てる)

大三 又、乾物か、(ひやかす様に) なあ、キリスト教、お主、乾物は生き物じゃないと思うとるらしいが、乾物だって元を正せばだな……。

久美 ……生き物です。お肉を食べないのは、生き物だからじゃありません、危険だからです。

大三 危険? ……ニキビでも吹き出すのか。

久美 先生が食べると私が危険だからです。

大三 成程、猛獣に肉は禁物か。

久美 私だから良かったんです。……この辺の娘さんなら、とつくの昔に先生の毒牙にかかっています。

大三 毒牙? 毒牙はちよつと可哀想だろう。

久美 先生は、私なんかへびに睨まれた蛙だと思ってるらしいけど。

大三 いや違う、ネギをしょった鴨だと思つとる。

久美、胸に十字をきる。

大三 (久美の代りに) ああ神よ、この罪深き者を許したまえ。

久美、入りかける。

大三 だが、この暑いのにあの襖ふすまは取りはずすがいい、あれぐらいわしがその気になれば簡単に破れる。

久美 (傍を通りながら) 帯がほどけてます!

久美、去る。

大三 ほどいてあるんだ。

立って無造作に巻きつける。

大三 ……フンいつまで続く気だ。蛙までひからびた声出しよって……。

〽雨々降れ降れ母さんが

蛇の目でお迎えうれしいな

自転車をはいて寺男の青山がやって来る。

青山 ああ居た居た。  
大三 おう葬レン屋、お主ン処も日照りらしいの。  
青山 先生こそ、日の日中から日光浴ですかい。  
大三 夜中に日光浴出来るか。……何だこの暑いのに……。  
青山 (汗をふき) これだ。今日は何日だと思ってるんです。……へイこの通り(封筒を出す) 前金です。  
大三 そうか、今日の約束だったナ。(封筒の中を覗いて) ニセ札じゃあるまいな。  
青山 ……どうしてこう口が悪いんだかねえ。  
大三 じゃ今晚は前祝いだな……だが(奥へこなし) 内緒だぞ、人心を動揺さすといかんからな。(ふところへ入れる)  
青山 へえ内緒ですか。  
大三 ……どうだ、この間の葬い合戦といくか。  
青山 へへ、そう来なくっちゃ、……葬いとくりやちとらは商売、もう貰ったようなもんだ。  
青山、勝手知った風で上り、将棋を取りに行く。  
大三 しかし、お主も悲観するには及ばん、近頃大分腕をあげて来よった。  
青山 ヘッ、あつしは飛車を落としてるんですぜ、飛車を……。  
大三 飛車を落して尚勝てん、所詮衆生は救い難しだ。  
青山 医者坊主の真似をしちやいけねえや。(と、盤を置く)  
二人、駒を並べる。

大三 医者と葬レン屋が将棋をさしとるうちは無病息災、天下泰平だナ。  
青山 ところで、大丈夫でしょうな。  
大三 高垣か？ お主、よっぽどキリスト教が怖いらしいの。  
青山 へへ……週刊誌に出とりましたぜ、女で歯が立たんのは、めがねのインテリ、やせたオールドミスそれにクリスチャンだって……。  
大三 クリスチャンを最初に云って貰いたいな。  
青山 あの人の睨まれると、あつしはこの辺(背中)がぞうつと……。  
久美、出て来る。  
青山 (慌てて) お邪魔しとります。毎日よう続きますのう……お変わりございませんか。  
久美 ハイ。  
青山 (大三に救いを求め) ここん処の暑さ云うたら三十年振りでしょうな先生。  
大三 さあ、わしは二十年にしかならんからの、この村は……。  
久美 (大三に) 町まで行かせて貰います。  
青山 大変ですな、巡回相談ですか。  
大三 肉を買いに行くんだ、ビフテキにする厚い奴をな。  
久美 教会へ行くんです。  
大三 ああ云え云え！ 何んとも云いつけて来い、あんなカマキリの腹下しなんぞ怖かないぞ。  
青山 折角だけんど教会の旦那なら居なさるめえ、先刻バスで出掛けよりなさったで。  
久美 そうですか。

久美、冷たく去る。

大三 お主がつまらんことを云うのでビフテキ食いそこなったぞ。

青山 先生、又やったね。

大三 何を？

青山 何をもって、何か悪いことを……。

大三 先生のやることに悪いことがあるか……王手。

青山 じゃ、こちららは桂馬の尻からげといくか……ね。先生、一度聞いて見ようと思  
つとったんじゃが、正直な処、どう云うんです、先生と、あのキリストさんは……。

大三 何が？

青山 いや、つまり、夫婦ってんでも……ない……ん……でしょう。

大三 当り前だ、あんなの女房に出来るか。

青山 まあ、年がね。……と云うた……。

大三 医者と看護婦さ。

青山 御、御冗談を……それ位いあつしにだって……。

大三 お主、カストリ雑誌の読みすぎだ。

青山 そうですかねえ。(と、信じられない)

大三 本人が云うんだから間違いない。

青山 そんなもんですかねえ、……一つ屋根の下に寝起きて……。

大三 お主なんぞと一緒にされてたまるか……と云いたい処だが、考えてもみろ、相手  
は要塞堅固なおキリストだ。

扉が開いて二人ギョツとする。

久美 先生(入口から)前島さんがむくみが出て引かないそうです。

青山 前島屋の若奥さんですか？

大三 むくみが出りや、見てくれだけでも一寸はましになつたらう。

久美 直ぐ往診して欲しいそうです。

大三 往診？ //先生は今忙しくて手が離せません"……。

久美 そんな嘘、私には云えません。

青山 行つて上げなさいよ、私は又出直して来ますで。

大三 行つたつて、気休めの注射だけ無駄だ。

久美 (ツンと) そうでしょうか。

青山 そうですよ、折角先生を頼つて……。

大三 頼られたつて医者に何が出来る……。

青山 それがいけんのじゃ、先生、……昔の先生じゃない、今じゃお医者先生一人じ  
やないんですぜ。

大三 判つとるわ、それ位い……。

久美 どうなさるんですか。

大三 誰が来てるんだ。

久美 御主人です。

大三 あのチビか、ようし、わしが出る。お前、ここでこ奴を見張つとれ、こ奴時々駒  
を動かしよる。

大三、立ち上って、のっしのっしと出て行く。  
青山 へへ……暑いですなあ。

## 2 同、玄関がわりの土間

前島、待っている。

前島 ええ、日よりです。

大三 (来て) どうしたツ、むくみが来たって？

前島 へえ、先生、今朝から勝子さんがむくんどるです。往診をお願いしますです。

大三 むくみが出る様じゃ余り長くないな。

前島 えっ先生、本当ですか。

大三 ええか、この間も云った通りカミさんの体は注射打ったからってラチはあきやせん。……残された道は、唯一つ、転地療養させて、たらふく栄養物をとらせることだけだ、一日遅ければ一日寿命がちぢまる。なんだ、大の前島屋が蔵の一つや二つ抵当にぶち込んだって、カミさんの養生費位い出せんことあるまい。それさえ決めて来れば、何時でも往診してやる。それまでは往診も投薬も一切おことわりだ。

前島 だけど、それは親族会議を開かんと……。

大三 家族会議でも親族会議でもええ、何でもええから早いとこ決めて来るんだ。

前島 親族会議をすりゃ、皆で勝子さんのこと悪う云うに決つとるンです。

大三 勝子さん勝子さんって、お主の女房じゃろが、それに女房が可愛いなら、どうしてお主が矢面に立ってやらん、かばうてやらん！ 蔵とカミさんの命とどっちが大切じ

や。

前島 へえ、そりゃ……。

大三 そりゃ……何じゃ。

前島 その療養所へ入れば、勝子さん間違いのう、なおりますンでしようか。

大三 (怒って) 馬鹿もん！ 医者に命の保証なんぞ出来るか、そんなことは春日の森のおキツネさんにもお伺いを立ておるこつた。

前島 へえ(と圧倒され)……じゃ皆ンなとよう相談して参りますで、宜敷くお願い致します……お邪魔致しましたです。

大三 (返事もしない)

## 3 同 縁先

久美と青山が将棋盤をはさんで坐っている。

青山 正直な話、あんたが来て下さるまで、この看護婦は半年と続いたためしが無かつたですからな。通いでもそうなんだから、あんたのように住み込みで二年も続いたなんて、こりゃ、キセキですわ。

久美 奇蹟なんて云う言葉は軽々しくお使いになるもんじゃありませんわ。

青山 へえ、そうですね。しかし……村の連中が云うとりますよ、この診療所はあんたで持つてるんだってね。へへ、本当ですぜ。

久美 あの、駒が一つ動きましたけど……。

青山 ヘッそうですね、へへへ……こいつ仕様がねえな、全く……。 (と、手をたた

## 4 薬室

大三、やって来て水菓を調合し始める。

青山の声 しかし、田舎暮らしは退屈でしょうがの。

久美の声 いいえ。

青山の声 まあ、先生の傍に居りや退屈はしねえだろうけど……。

久美の声 どう云う意味ですの、それ？

青山の声 (困って) いや……その……何をみても、先生は面白い先生ですけんなあ。

大三、苦笑している。

## 5 縁先

青山 先生も昔はあれほどじゃなかったんだがねえ……口の悪いのは悪かったが……。

久美 私が来てからだとおっしゃるんですか？

青山 と、とんでもねえ(小声になり)ここだけの話だが、先生がこう荒れ出しなされたのは岩崎医院が出来てからですよ。……まあ無理もねえ、先生は、医者居ねえこの村に初めてやって来て、二十年も苦勞しなされたんだ。そこえ、岩崎のボンが帰って来て開業して当った。こりや面白かねえですよ。先生としちやあ。

## 6 薬室

調合を終った大三、よく振ってラツパのみをはじめ。アルコールである。

青山の声 先生が来て下すった時には、そりや村をあげて大変なもんだっただんですからね。初めてお医者様が来て下さった、東京の大学を出とられるそうじゃちゆうて……まるで生き神様だ。村の娘どもは、みんな目の皮つり上げて血道をあげたもんじゃない。

## 7 縁先

大三、やって来る。

大三 お主、知らんな、今だって娘や若後家どもが、わしを追いかけ廻しとるのを……。

青山 (あっさり) 聞かねえナ。

大三 夜中に一度来てみるがええ、女共が門前市をなしとる、なあ。

久美 (潔癖らしく顔をそむける) どうなさるんですか、前島さん。

大三 行くことはいらん。

青山 ねえ先生、今も云ってたんだが、先生も一寸は人気ってことを考えねえと、昔の一人天下とはわけが違うだから……岩崎医院じゃ今度の町会議員に立つちう噂だ。何てったって地元は強いんだから……。

大三 ……議員なんてみんな地元だろう。

青山 ……先生のことなんですよ。……小学校の校医は持ってかれる。農協の指定にはなる……青二才だからって馬鹿には出来ねえです、早い話がガキにアメの一つもじゃぶらせておきや……。

久美、立って行きかける。

大三 おい、アメ持って来てやれよ。

久美 あれはウチのじゃありません、日曜学校のです。

大三 堅いことを云うな、……冷えたお茶があったら尚結構……王手だ。  
久美、そのまま去る。

青山 王手どころか、油断していると今に患者だって、*「ごっそりと」*。

大三 持ってって呉れば大助り、一束十銭で売り度いような患者ばかりだ。

青山 ま、家の方はあつしに委せといて下さい。部落の真中に、ええ家見付けますから……誰だって、寺の手前に病院があるってのは、気持のええもんじゃありませんからね。

大三 その点、今度は、寺の手前に葬レン屋だ。

青山 だから欲しかったんですよ。

青山の女房、かねがやって来る。

かね あんた……（大三に）何時もお世話になります。

青山 何じゃい。

かね あの……新田の土井さんから……先刻亡くなられたちゆうて……。

大三 （顔色が変わる）

青山 へえ、新田の土井……誰だろう。

大三 （何くわぬ顔で）次男坊さ……一帳お上りだ。

青山 矢っ張り先生ところの患者ですな。

大三 予定より少し早過ぎた。

青山 じゃ先生……へへへ、先生が葬合戦なんて云うで、本当の葬合戦になりおったか

な。（と、将棋盤を片づける）

大三 感謝しろ、藪医者のお蔭で商売繁盛だ。

青山 嫌なこと言いっこなしですよ。

かね、家の中を覗きこんでいる。

青山 お前どうする？ 後に乗ってくか。

かね （小声で）大ダンスは矢っ張りあそこに置くんだねえ。

青山 （軽く）馬鹿ッ……じゃ、お先に……。

青山、自転車をおして去る。

SE——雄鶏、一声大きく。

大三、放心したように突っ立って中天の空を睨む。

大三 （振り払う様に）おいッ、モーニングッ！ モーニングだ。

大三、カルテを探し出す。

久美、出て来る。

久美 どなたが？

大三 土井の次男坊……。

久美 まあ。（十字を切る）

大三 十字を切ったって生き返りはせん、死んだ奴は死んだ奴だ……モーニングを出してくれ……レントゲンは……。

久美 レントゲンは岩崎医院から貰いに来たので渡しました。

大三 フン、岩崎医院、厄札を拾いおったな。

カルテ、下の方から出てくる。(カルテを読む)

久美 いらっしやるんですか、土井さんへ……。

大三 向うで見限ったからって、一度は脈をとったんだ。……モーニングはどうした。  
(カルテを読みつづける)

久美、黙ってモーニングを出して来る。

久美 では、約束して下さい。……決してお酒は飲まないって。

大三 心配するな、わしの体はわしが一番よく知ってる。

久美 先生がお体こわしたって自業自得です。人格にかかわるからお願ひしてるんです。

大三 体ならいいが人格は困るのか。

久美 先生は、何も知らないから、そんなこと云ってられるんです。

大三 何も知らない？

久美 村の人達が何て云ってるかを……。

大三 お前とわしの仲が怪しいとでもぬかしよるか。

久美 じゃ云います // 診療所じゃ、自分の殺した患者をエサにして、振舞い酒をたかりに行く”って。

大三 何だと。(初めて激怒する)

久美 色んなところで耳にしました。業々わざわざ聞えよがしに云った人もいます。神父さんも注意してくれました。

大三 (怒りを押えて) ……成程、殺した患者を餌にしてか、田舎者にしちや、うまいこと云いおったな。

久美 腹が立たないんですか。

大三 事実なら仕方あるまい。

久美 自分で認めるんですか、本当にお酒が飲みたいから……家でお酒が飲めないから……だからそうなのですか。

大三、黙々とモーニングを着る。

久美、そんな大三をじっと見ている。

久美 これだけ申上げて、今夜も同じなら今度という今度こそ……私。

大三 辞めさせてもらいます、か。

久美 はい。

大三 わしのような救いような男を救うのがクリスチャンの役目じゃなかったのかい。

久美 やっと判りました。イエス様にだって不可能なことはあったんです。

大三 そうだとも、それが判れば上等だ。男に捨てられてクリスチャンになったり、こんな山の中へ入り込むなんて、どだいオーバーもいいところだ。人間思うようにならないことだらけ、不可能なことだらけだ。それが今頃分ったのは、やっとお主も大人になつたと云う証拠だ。

久美 先生のお酒も不可能なことだとおっしゃるんですか。

大三 心配せんでも、今日は飲まん。

久美 本当ですね。

大三 ああ飲まん、仏さんを拝んだら直ぐ戻って来る……ネクタイ!



久美、さし出してやる。

久美 お願ひします。晚ご飯、用意しときますから。

大三 この暑さに、こんな恰好で、そう何時までもかしまつて居られるか。

久美、診療所の鏡を持って来て、ネクタイを見せてやる。

大三 こ奴（モーニング）も大分線香の匂いで箔がつきおつたな……誰以来だ。

久美 仲田のお婆ちゃんの時です。

大三 喪章もついとると。

久美、念珠とハンカチを渡してやる。

久美 靴はボタンの方ですか。

大三 磨かんでいい、（後につづこうとする久美に）送らんでいい。

大三、一度奥へ去る。

久美、大三のぬぎ散らしたものを片付け始める。

棚の封筒が落ちる。

久美、拾って、中身に驚く。

大三、庭へ出て来る。

大三 おい、かつぎ込まれたりすると面倒だ、前島へ注射を打ちに行つてやれ、そして親族会議とやらが決つたら、わしにも出させると云つて来て来い。むくみが余りひどい様なら、例の取つておきの奴を使うんだ……いいな。

久美、じつと大三を睨んで答えない。

大三、出て行く。

## 8 同 診察室

神父が来ている。

久美 （黙つてうちわの風を送っている）

神父 ……で、どうする？ 一まず、教会へ来るかネ。

久美 これ以上、神父さんに……。

神父 いや、私にも責任があることだ。……あれから何年になる？

久美 二年と一寸です。

神父 東京からこう云う仕事をやってみたいという手紙を貰った時、田辺さんと君ならきつとうまくゆくと考えたんだがね……こんな山奥へ入り込んで二十年も頑張り通してゐるんだ。たとえ神の御心にそむく様な行おこないがあつたとしても決して根っからの悪人じゃない……同じ屋根の下で同じ目的のために助け合つてゆけば、君の心の傷も癒されるだろうし、お互いに慰められると思つたんだがねえ。

久美 私が至らなかつたのです。

神父 いや、私も近頃では自分の考えが甘かつたことに気付いてるんだよ。君に云われるまでもなく、私の耳にも色々な噂が聞えて来る。君達が村の連中からみだらな眼で見られることも知つていた。

久美 神父さん……。

神父 ああ、君は同じあやまちを二度も繰返すような人じゃない。それは信じている。そうなんだろう？

久美 ……。(顔をそむけ、うちわが止る)

神父 それとも、それともあの噂は事実だと云うのかい?! 君は又……東京の二の舞を……。

久美 いいえ、誓って……。

神父 そうだろうとも……君ほどのクリスト者にそんなことがあるう筈がない、それこそ、主を冒瀆するものだし、そんなことがあれば第一私が許しません……決して許しません。

久美 でも、私が守り通したのじゃありません。先生は私を女だとは最初から思っていないのです。

神父 しかし、君は先刻、田辺さんが夜中に襖を叩いたり、獣の様な大声を張り上げたりすると云ったじゃないか……。

久美 それは……それは……そうですけど……。

神父 私としてはそんな処へ君を置いとくわけにはいかない……君にはまだ、男というものが分つてはいないのだ、そういう事実を知った以上、たとえ、君がとどまると云つた処で、このまま、君をここへ置いとくわけにはいかない。さあ、仕度したまえ。……今夜は私の処へお泊り……田辺さんには明日でも私からゆっくり話をしよう。

久美 そんなに、いけないことなんでしょうか、先生のなさることは……。

神父 君、何てことを云うのだッ! 主の御教えを忘れたのかね。

久美 いいえ。

神父 そりや、私も君達が夫婦になることを考えなかつたわけじゃない。しかし神の御

前に愛を誓い合つたものと、そうでないものとの間には、同じことでも天と地のへだたりがある……それ位いのことが判らんのかね、君はそのために、東京で大きな傷を背負つたんじゃないか、それでこんな処まで来たんじゃないかね。

久美 ……でも、あの人と先生との場合は……。

神父 (決めつけて) 同じです。問題は愛です。田辺君は、君を愛してるかね……愛してれば、その前に君に結婚を申込む筈じゃないか。そうだろう? そうじゃないかね。

久美 ……。

神父 ……私は、田辺さんが無医村だったこの村へ入つて来て、多くの村人を救つてくれた功績は高く評価しているし、その犠牲的精神は神に通ずる崇高なものだと信じて来た。君にしても同じだろう。しかし長い年月の間には、人間も変るものだ。流れる水は清くとも、よどめば濁り、腐つて来る……今更、流れに戻した処で清水を濁すだけなのだ。……今の田辺さんは昔の田辺さんじゃない。この家をこそもあろうに寺男に売つても町中へ出て岩崎医院と張合うことしか考えていない唯の男なのだよ。

農家の主婦、提灯をさげて庭先を通り抜ける。

主婦 (一寸酔っている) お晩です。

久美 お晩です。

主婦 先生まだかの?

久美 ええ……小母さん、先生が何か。

主婦 診療所の姉ちゃん……お通夜なんぞに、先生出さんがええで、うん、出したらいかん。

久美 じゃ、又。  
主婦 困ったもんじゃなあ、酒グセが悪い云うのは、昔から酒は気狂い水じゃと云うけども……。

主婦、去る。

神父 さ、……そうと決めたなら今夜は、会わん方がええ……教会へ行くとき置き手紙でもしとくんだね。

久美 (うなづく)

久美、立って薬室へ行き、メモに書きはじめる。

途中でペンが止る。

久美、出て来て――

久美 神父さん……矢張り、今夜はここで待ちます。聞きたいことがあるんです。

神父 (やや怒りを含んで) 君はそうやって何度くじけて来たんだ。もう我慢が出来ない云うから、私もその気になれば、翌日は、もう「もう少し我慢してみます」一体君はどっちなんだ。辞めたいのか、辞めたくないのか。

久美 違います。そうじゃないんです。確かめたいんです。最後にもう一度、自分自身で確かめておきたいんです、先生って方を……。

## 9 土井の家

土間に沢山の下駄や草履が並んでいる。  
祭壇。

女、土間からお銚子を運んで行く。

三々五々、鋤の作り方など仕方話をぼそぼそやってる通夜の客。(その中で大三の  
蛮声が一きわ耳につく)

大三 あつ、姉ちゃん姉ちゃん、ここへもう一本置いてつてくれ。

隣の男 先生、もうおよしになった方が……。

大三 構わん構わん、飲んでやるのが仏への功德だ……。今日の仏はな、小学校出るときは健康優良児だった……ま、一寸、体重は足りなかったがな、ハハハ、そこはわしがおおめにやっつたンじゃ。

隣の男 そうですかい、あんまり呑みすぎると、帰りに春日の森のおキツネさんにだまされませ。

大三、ああ、コンコン吉、大歓迎！ いつでもだまされてやる。……おい何処へ行く？  
おい……。

隣の男 一寸、仏に……。 (去る)

大三 フン、逃げおったか。

一人取り残されるが一杯飲んで立ち上り、話相手をみつけ――

大三 おいッ、こらッ……。

青山、やってくる。

青山 (引とめて) 先生、先生！……まあ坐った坐った。ここは狭いんですけえ、もう一寸静かに……。

大三 おう青山、如何に商売だからって、何もそうウロチヨロするな、ええッ？

青山 まあまあ先生。(と、なだめる)

大三 ああ判つとる判つとる、まだ酔ってはおらん、おい葬レン屋、ま一杯いこう……  
貴様だつて人間だろ？

青山 だつてはひどいな。

大三 貴様だつてだ、誰様がいくら威張つたつて、一度は葬レン屋の世話にならにやならん、貴様の世話にならにやならん、ええ、そうだろ？

青山 ああ判つてます、判つてますよ。

大三 判つとるか、判つとるなら腰をすえて飲め、飲む資格がある。

青山 困っちゃうなあ、先生には……じゃ一杯だけ。

大三 (ついでやりながら)なあ、誰が決めたんだ。……医者は病気をなおすもの、葬レン屋は葬式を出すもの、一体誰が決めた？

青山 さあ、誰ですかねえ。(腰を浮かす)

大三 ま、落着け、誰が一体決めたんだ。医者は病気をなおすもの……。

青山 葬儀屋は葬式を出すもの……。

大三 坊主はインドウを渡すもの……一体誰が決めた……既に今日の仏だつて、長い間  
医者代払つて結局は……どうだ？ そうだろ？ 何のために高い薬代払つて……女の一人も知らんと。

青山 先生、さ、送って行きましよう。(周囲に)へへへ、飲まなきやいい先生なんですかね。

岩崎、進み出る。

岩崎 田辺君。

青山 ああ岩崎先生、まあ……田辺先生大分酔つてなさるで……。

岩崎 君は、君は僕の処置に間違いでもあったと云うんですか……そう言いたいんですね。

二、三人、とめに入る。

大三 誰がそんなこと言つた？ 誰が……。

青山 田辺先生も……。

岩崎 確かに僕の力は至らなかつた。それは重々申訳ないと思つてる。

大三 そのとおり！

岩崎 しかし何も君からそんな風に言われる覚えはない。それは、仏が一番よく知つてくれたと思う。僕はやれるだけのことはみんなやつた。

大三 ……立派だ。岩崎君、君は立派だよ。

仏の姉 いえ、岩崎先生には、それはもう出来るだけのことはして頂きました。それは私達がよく……。

岩崎 いいえ、至りませんでした。

大三 ハハハ、奥さん、奥さん、それで気が済むのかね……ええ、あんたの弟さんともう二度と帰つては来んのだぜツ！ 押入れの中を探したつて、牛小屋を探したつて、もう何処にもいないんだぜツ！

仏の姉 (激情から大三の頬を張る。二つ、三つ)帰って下さい！ お帰り下さい、仏が泣きますすけえ！(と自分も泣きくずれる)

姉、人々に連れさられる。

岩崎 君は医者として恥かしいとは思わんのか……医者を代えるのは、患者の自由意志だ、誰のせいでもない、よく自分の胸に手を当てて考えてみるといいんだ……それを根に持つなんて……恥を知りたまえ、恥を！ 僕は同じ医者として君のような同業者を持ったことが恥しい……失礼する。

岩崎、入口へ。大勢が「先生、お待ち下さい」と引きとめながら追ってゆく。

大三 ……恥を知れか。

大三の上げた瞳が少女の怒りの瞳とぶつかる。

二人、じつと見合う。

少女たまらなくなり顔をおおって泣き出す。

見送って出た連中が戻って来る。

男 この野郎こそ、つまみ出せッ！

一同 そうだ、そうだ。

大三の銚子が足蹴にされる。

青山 まあまあ、ここン処はどうか私に。先生は私がすぐに連れ帰りますから……さあ皆さん、お騒がせしました。どうぞお続けになつて下さい……さ、先生は、帰りましよう、又キリストさんに叱られますぞ。

大三 あんな奴、一寸も怖かねえぞ。

青山 当り前ですよ、向うは看護婦で、先生は先生じゃありませんか。

大三 怖かねえ、何だあんなの……。

青山 そうそう、その意気で……じゃ、その前に、ネ、一寸だけ一寸だけ、手をついて、皆さんに……おわびをね。

大三 うむ？……こうか。

大三、ガマのように坐り直す。

青山 そうそう（代弁して）どうもお騒がせしました。すみませんでした。（小学生にでも云うように）ハイよく出来た、出来た。じゃ、私、送り届けて来ますから……さあ先生、もういいもういい頭を上げて、先生ッ……センセイッ！

大三の肩は鳴咽にふるえている。

## 10 森の小道

（ふくろうが鳴いている）

青山、大三に肩をかき、よろけながらやって来る。

青山 さあ、しっかり歩いて下さいよ。

大三 ……ここは何処だ？

青山 春日の森ですよ……さあ、早く……。

大三 あっそうか（見廻し）おキツネさんは出て来んか。

青山 先生、本当に酔ってンですか。

大三 酔ってなぞいるか。

青山 じゃ、矢っ張り酔ってんだ。

大三 黙ってろう。

青山 仕様がないなあ……ねえ先生、先生はどうしてああ悪タレ口を叩くんです。みんな日照り続きで気が立ってるんだからねえ……。あの癖さえなきや誰にだって好かれる先生なんだよ……それを……今夜はあつしだつて少々愛想をつかせましたぜ。

大三 そうか、つかせたか。

青山 そうかじゃありませんや、あつしだつてねえ、人前でああ葬レン屋、葬レン屋つて云われたんじや、いい気持はしませんからね。

大三 馬鹿ッ、葬レン屋が何だ、お主が葬レン屋でなけりや、わしだつて付合わんど、葬レン屋だからこそ……。

青山 (悲鳴に近く) ウヘエッ! 出たッ……出たッ……キ、キツネ。(震える)

大三 何処に?

青山 あ、あの木の向うに。

木の向うに女の姿がかすかに浮ぶ。

大三 (おちついたまま) うむ、出よつたか。

青山 先生、引返すんだ! 引返すんだ。

青山、一目散に走り去る。

大三、尻もちのまま暗闇をすかして見る。(風が吹き、枯葉がなる)

久美 先生!

大三 なんだ、お主か……。

久美 なんだじゃありません!

大三 ハハ、葬レン屋、とんで逃げおつたぞ。

久美 先生ッ……又飲んでおつたんですね、あれほど云つたのに……あれほどお願いしたのに……!

久美、近づく、大三逃げ腰になる。

久美 何故飲んだんです……何故先生は約束が守れないんです。

大三 (這つて逃げながら) 飲んじやいないよ……いや、飲んだつて……酔っちゃいない……本当だよ……本当だつてば……。

久美 それでも酔つてないんですか……それでも……。二人、大木をはさんで、つかまえようとする者と逃げるものとの追いかけっこになる。

大三 そんな怖い顔をせんでくれよ……話せば……話せば判ることなんだ。

久美 もうだまされません……さあ家へ帰るんです。

久美、大三をとらえ、襟をもって引き上げる。

久美 さ、立つんです。

大三 (駄々っ子の如く) 嫌だよう!

久美 立つて、歩くんです!(きめつける)

久美、大三の耳をひっぱる。

大三 痛い、痛い痛い、ちぎれるじゃないか。

久美 何でもいいから歩くんです……あれほど約束するときながら……恥かしくないんですか。

大三 痛い、痛いよう。  
久美 痛けりや歩くんです。早く帰るんです。  
大三 カンニンしとくれよ……家へ帰ってから怒らないって約束しとくれよ。  
久美 ……知りません。  
大三 なあ、約束しとくれよ。  
久美 先刻、岩崎さんに会いました。『あんな奴は人間のクズだ、人間じゃない』ッて……。  
大三 フン。  
久美 何をなさったんです？  
大三 痛いよう、ちぎれるよ。  
久美 さ、何をなさったんです。  
大三 歩けないよ。  
久美 歩けなきゃ、這うんです。這ってでも帰るんです！  
大三 頼む、カンベンしてくれッ！……わしが悪かった……カンベンしてくれようッ！  
久美 (溜息)  
大三 何とか言ってくれようッ！(全く子供が母親に甘える様な大三である)  
久美、大三をひきずる様にして連れてゆく。  
M——静かに入って。

## 11 田辺診療所居間

白布をかけられたままの夕飯。  
大三の枕元に久美が端坐して、じっと大三のあどけない寝顔をみている。  
(柱時計が四時を打つ)  
大三 うーむ(と、寝返りをうつ)……何だ、まだ起きとったのか……う、うむ、痛た  
た……水！  
久美 頭の上にあります。  
大三 (起き上り) どうした……早く寝んか。(水を飲む)  
久美 今日限り辞めさせて頂きます。  
大三 うん……？……そうか、何時だ、今？  
久美 四時です。  
大三 (しんみり) そうか、行くのか。  
久美 ハイ。  
大三 行く先あるのかい？  
久美 一度東京の兄の家へ帰って、それから考えます。  
大三 そうかい、到頭東京へ帰る気になったかい。  
久美 お引きとめにはならないんですね。  
大三 引きとめれば居てくれるのかい？  
久美 いいえ。  
大三 そうだろう……大分たまつとるな、給料……。  
久美 そんなもの、もう、ずうっと前から諦めています。

大三 そうはゆかんさ、こう云うことはビジネスでいかんとな。

久美 じゃ、その分だけ診療所に寄附していきます。

大三 いや、金ならある。

大三、周囲を見廻す。

久美 (立って) これでしようか……この家をお売りになったんですか。

大三 うん、青山に売った……ここは場所が悪いからな……それで辞める決心をしたのかい。

久美 いいえ、先生とは、御一緒にお仕事出来ないことが判ったからです。

大三 つまり、あいそをつかしたわけだ。ハハ……(封筒のまま) これ、給料のたまつた分と退職金と餞別の一からげだ。取っておきたまえ。

久美 (受け取らず) 私、中身を見てしまいました……十万円です。

大三 そうかい、いいじゃないか……取るときなよ。

久美 (大きな目で大三をみて) 先生は、私の退職金をつくるために、家をお売りになつたんですか……私を辞めさすために……。

大三 何を云うか。

久美 じゃ、私がこれを頂いたら、先生はどうなるんです。

大三 馬鹿な、これは前金だよ、全部じゃない、まだまだたんまり入るんだ……さ、それをもつて早く行って寝たまえ。

久美 ……最後に一つだけお聞きしたいことがあります。茶化さないでおっしゃって下さい……先生は私のことお邪魔だったんでしょうか。

大三 いや、長い間よくやってくれたと思つとる。

久美 いいえ、それだけじゃない筈です。正直におっしゃって下さい。

大三 人間誰だって長い間一緒におれば、たまには鼻につくことだってあるさ、自分自身だってそうなんだから当然のことだ、気にすることは無い。

久美 私、とうとう先生って方が判らずじまいでした……太っ腹なことをなさるかと思うと、イライラなさつたり、人がよかれと思つてしたことを怒つたり、ののしつたり……そうかと思うと、お酒にまぎらして子供の様にお甘えになったり……でもそんなことはいいんです……私は確かに先生のお陰で、二年前の打撃から立ち直れたんだと思ひます。その先生と、こんな割り切れない気持ちでお別れするのが一番残念なのです。

大三 わしが、君を邪慳にあつかつたとすれば、それは君が親切すぎたからさ……君は看護婦である以上に人間であり過ぎる。

久美 いけないことでしょうか。

大三 君は人の奥さんになつたらいいのだ。平凡ないい奥さんが出る。

久美 先生に奥さまがいらつしやつたら私だって、こんなに先生の中に立ち入りはしません！

久美の大三の視線をさけた顔から嗚咽がもれる——耐えられなくなり、隣室へ行き、背中をみせて坐る。

大三、じつと痛ましそうに見る——立ち上りかけるが、思いとどまる。

(長い間、遠く刻を告げる鶏の声)

久美 どうぞ、お休みになつて下さい。



大三、立って行き、襖を閉めてやる。

久美、背中をかたくして動かない。

大三、布団に戻りながら、ふと飯台の白布をとってみる。

お銚子とビフテキ。

隣室の動かぬ久美。

大三、布団へもどる。

久美、立ち上ると大三の身の廻りの品など片づけ始める——終って台所へ。

大三、目を見開いている。

(水音、茶わんを洗う音が聞えてくる)

久美、戻ってくると、襖の前に坐り、閉めたまま——

久美 ……では、お休みの間にたたせて頂きます。朝御飯の用意はしておきました……  
お体にはお気を付けになって……。

大三 (短い間) ……待ち給え……やっぱり君にだけは聞いて貰おう。  
襖が静かに開く。

大三 もう二十二年も前のことだ、わしはこの手で、この手にかけて自分の子供を殺したんだ。

久美 えッ。

M——静かに。

大三 那三子と云った……妻の支那子の那と私の三をとってつけたんだ。やっつとよちよち歩く一年と二ヶ月目だった。傲慢な医者としての慢心が那三子を殺したんだ……当時

医者になりたてのわしは有頂天だった。……どんな事でも出来ると思い込んでいたんだな……まして目に入れても痛くない一人っ子だ。人の手に掛けたくなかった。いや人の手に掛けることが不安だったと云うのが本当だろう……自分の実力で直してやるのが父親の愛情だと思ひ込んだ。妻もそれを望んだ。いやわしがそう思ひ込ませたんだ。

久美 何だったのですか。

大三 アッぺだ。

久美 盲腸で？

大三 手術の中じゃ一番簡単な奴だ……処が開いてみると、移動性だった。私はあわてて小さな可愛い腸をさぐった。あわてればあわてるほど思う様に手は動いてくれない、自分の手におえないと判った時には、もう手遅れだった。しかも逆上した私は麻睡の切れて来た那三子にもう一度麻睡をかけて了ったんだ。……これが殺人でなくて何だね。

久美 しかし、それは……。

大三 有り得ることだよ……だが有り得ることだからって赦されるわけじゃない。那三子は私を信頼しきって手術台に上ったんだよ。パパが直ぐにお腹の痛いのを止めてくれると信じ切ってたね。

久美 ……。

大三 勿論その以前にも手術の執刀は何度かやった、臨終の枕辺にも何度か立ち会った。そんな時と那三子の死とはわしにとって全く別の出来事だったんだ。

大三 しかし考えてみたまえ、一つの命が失われたことにどれだけの違いがあるんだ。

……妻は那三子との思い出に耐え切れなくて去って行った。……私は子供を殺し妻の一生を台無しにして初めて医者である恐ろしさを知らされたんだよ、医は仁術なりと云うが、機械の様に冷く生きてこそ正確さが期待出来るんだ……甘っちょろいヒューマニズムなんか医学と云う武器を持つてるだけに、狂人に刃物を持たせる様なものなのだ。そうだろう？ そうじゃないかね。何度医者を辞めようと思ったか知れない。だが一方では、医者を信仰のように待ち望んでいる人達が居る。そして私には、それなりの手助けも出来るんだ。一度医学を学んだ以上、それを放棄することも罪悪だし、かと云って、預けられた信頼を、命を裏切った罪は、どうしてつぐなえたいのだろうか。所註、医者というものは、罪の権化として生きるより他ないのじゃないだろうか。

久美 先生は、医者と云う十字架を背負って罪の底に沈もうとしていらっしやるんですね。

大三 そんな大袈裟なものじゃないさ。妻に去られ、妻の一族から人非人とののしられて、ようやく、医者が正直に生きてゆくためには、そう云う生き方しかないのだと思う様になったんだよ。

久美 じゃ、お通夜でお酒をお飲みになるのも、つまはじきされるのが目的なのですか、そうですね。

大三 わしがつまはじきされることで通夜に集った人々が仏をおしみ、仏を愛する人達の悲しみが、わしを憎むことでいくらかでもやわらげば、亡くなった患者に対する、せめてものお詫びになるんじゃないだろうか。

久美 先生ッ。(泣く)

大三 いや、それも後でとってつけた云い訳かも知れん、私にはお通夜に出向くたびに、那三子が手術台で最後にはほえみかけた顔が思い出されてならんのだよ……見てやって呉れるかい。

大三、立って机の鍵を開け、よれよれのハンカチ包みを出す。

中から出て来る乳首と那三子の写真。

大三、わざと見ない様にして立ち上り、縁先へ立つ。

久美、進み出て手にとって見る——益々泣けて来る。

大三 図体ばかり大きくても、自分ながらチツポケな人間だと思ふ、時々やりきれなくなると、君の処の襖を蹴ったり、大声を張り上げたり……本当に恥かしいと思ふ、赦してくれたまえ。

久美 (いいえと云う風に首を振る)

大三 (氣をとり直して) ハハ、いい年をしてセンチな奴だと思ふだろうが、このまま君に誤解されたまま二度と会うこともないと思ふと、つい……。

久美 いいえ先生、このままだ置いても置いても頂きます。

大三 そいつはいかん、お別れだから云ったのだ。(と戻つて来る) いかん、いかん。

久美 もう決して看護婦以上に立ち入らないとお約束しても……。

大三 いかん、いかん。

久美 私は、このままで充分倅せなんです。

大三 君はよくても、わしにはその約束を守る自信がない……。だからこそ、つい邪慳に当たったりしてしまうんだ。

久美 いいんです、それでも……。  
大三 君はまだ若いんだ、これからどんな人生でも切り開いてゆける……いい奥さんになるために東京へ帰るんだ、そして倅せをつかむんだよ。  
久美 これだけお願いしても……。  
大三 わしの様な人生は、わし一人でたくさんだ。

(間)

鍬をかついだ前島が通りかかる。

前島 ああ先生、お早いですね。

大三 おまこそ。

前島 ハイ、お蔭様で、療養所行きが決まりましたんです。

大三 勝子さんのか、そりやよかった。それでお前さんが二人前働らかされると云うわけか。

前島 へえ、でもいいんです。いくら働いたって。

大三 そうだとも……じゃ早速手続きを取らんとな。

前島 へえ、お願いしますです。

大三 いや、手続きは岩崎君にとって貰った方がいいだろう。今後のこともあるから……。

前島 な、なんですか。

大三 わしも、ここを引き払うことになったンでな。

前島 何処へいらっしやるンですか。

大三 奥沢村が来てくれと云ウンでな……あそこは誰も行きたがらんから……。  
前島 へえ、左様ですか。

久美、大三を見る。

大三 なに、若い岩崎君は立派な先生なんだよ。

前島 へ、へえ。

大三 私からも出しておくからね。

前島 お願い致します……左様ですか……。

前島、口の中でブツブツ云いながら去る。

大三 (久美に) 君には黙っていて、申し訳けなかったが、家を売ったのもその為なんだ……。奥沢村じゃ、農協の倉庫の二階を空けてくれるらしい……だから、いづれ君にも近いうちに帰って貰うつもりだったのだ。

久美 奥沢村って、あの山のもう一つ向うですね。

大三 ああ、これからは五里の山道を戸板に乗せて運んで来ることもないだろう。

久美 先生って方は……。

久美、嗚咽する。

大三、じっと見下ろしている――

SE――鶏の声やや近く。

大三 いい奥さんになるんだよ……。いい奥さんになって可愛がって貰うんだ。

SE――鶏が鳴く。

大三、庭へ出て行く――薄もやが地面をはっている夜明け。

大 三 (外に向って) 今日の葬礼は、いい日よりになるぞ。

久美も顔を上げて見る。

夜明けの診療所全景から山村全景へ。

M——エンディング、静かに盛り上って。

(終)